諫影的一部

# 語物代源

一卷

山田孝雄 校閲
谷崎昭一 的新訳

# 源氏物語

中央公論社

新譯源氏物語普及版奥附　昭和三十一年五月十日印刷　昭和三十一年五月十九日發行

譯者谷崎潤一郎　校閲者山田孝雄　發行者栗本和夫東京都千代田區丸の內二の二　印刷者長久保慶一東京都新宿區市谷加賀町一の一二　發行所中央公論社東京都千代田區丸の內二丁目二番地丸の內ビルディング五九二區

定價二百五十圓

# 新譯源氏物語の普及版について

潤一郎

此の普及版は、私が昭和三十年十月に刊行した五卷本の愛藏本と、內容は全く同じである。あの愛藏本は、私が昭和廿六年の五月から同廿九年の九月に亙つて刊行した新譯源氏物語を校訂し直して修正を加へ、安田靫彥田中親美の兩氏に考へて戴いて裝釘に美術的意匠を凝らし、靫彥畫伯以下十四畫伯の筆に成る插畫を各帖每に入れ、未曾有の豪華本として世に送り出したものであるが、今度はそれを六卷の小型な廉價本に縮め、本文は素より五十數葉の插畫もすべて凸版を以て複製した。たゞ愛藏本と異るところは、裝釘を改め

て小倉遊龜畫伯に揮毫して戴き、前回は尾上柴舟博士を煩はした表紙や扉等の題簽を谷崎松子が書いた。

茲に此の出版の由來を記して序に代へる。

昭和卅一年初夏　　京都潺湲亭に於いて

谷崎潤一郎しるす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 新譯源氏物語總目錄


| | | | |
|---|---|---|---|
| 卷一 | 桐壺 | 插畫 | 安田靱彦 |
| | 帚木 | 插畫 | 安田靱彦 |
| | 空蟬 | 插畫 | 安田靱彦 |
| | 夕顏 | 插畫 | 安田靱彦 |
| | 若紫 | 插畫 | 奥村土牛 |
| | 末摘花 | 插畫 | 奥村土牛 |
| | 紅葉賀 | 插畫 | 奥村土牛 |
| | 花宴 | 插畫 | 奥村土牛 |

| | | |
|---|---|---|
| 葵 | 插畫 | 福田平八郎 |
| 卷二 | | |
| 賢木 | 插畫 | 福田平八郎 |
| 花散里 | 插畫 | 福田平八郎 |
| 須磨 | 插畫 | 福田平八郎 |
| 明石 | 插畫 | 堂本印象 |
| 澪標 | 插畫 | 堂本印象 |
| 蓬生 | 插畫 | 堂本印象 |
| 關屋 | 插畫 | 堂本印象 |
| 繪合 | 插畫 | 山口蓬春 |
| 松風 | 插畫 | 山口蓬春 |
| 薄雲 | 插畫 | 山口蓬春 |

槿　　山口蓬春　挿畫

卷三

乙女　中村岳陵　挿畫

玉鬘　中村岳陵　挿畫

初音　中村岳陵　挿畫

胡蝶　中村岳陵　挿畫

螢　菊池契月　挿畫

常夏　菊池契月　挿畫

篝火　菊池契月　挿畫

野分　菊池契月　挿畫

行幸　德岡神泉　挿畫

藤袴　德岡神泉　挿畫

眞木柱　插畫　德岡神泉

梅枝　插畫　德岡神泉

藤裏葉　插畫　小倉遊龜

卷四

若菜上　插畫　小倉遊龜

若菜下　插畫　小倉遊龜　太田聽雨　小倉遊龜　太田聽雨

柏木　插畫　太田聽雨

橫笛　插畫　太田聽雨

鈴虫　插畫　太田聽雨

夕霧　插畫　中村貞以

卷五

| | | |
|---|---|---|
| 御法 | 插畫 | 中村貞以 |
| 幻 | 插畫 | 中村貞以 |
| 雲隱 | | |
| 匂宮 | 插畫 | 中村貞以 |
| 紅梅 | 插畫 | 山本丘人 |
| 竹河 | 插畫 | 山本丘人 |
| 橋姫 | 插畫 | 山本丘人 |
| 椎本 | 插畫 | 山本丘人 |
| 總角 | 插畫 | 橋本明治 |
| 早蕨 | 插畫 | 橋本明治 |

卷六

寄生　插畫　橋本明治
東屋　插畫　橋本明治
浮舟　插畫　前田青邨
蜻蛉　插畫　前田青邨
手習　插畫　前田青邨
夢浮橋　插畫　前田青邨

裝釘　小倉遊龜
題簽　谷崎松子



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 例言

一、此の書は獨立した一箇の作品として味はつて貰ふのが本旨であつて、なるべく現代人が普通の現代作品に對するやうに、一字一句の詮索に囚はれずに、安易な氣持で讀んで貰ひたいのである。それ故、本來ならば頭注等も施したくはないのだけれども、全然省略するのも不親切であるし、實際に於いて不便でもあるから、矢張說明があつた方がよいと思はれる事項には、注を加へることにした。しかし此の書を讀むくらゐの人なら當然知つてゐさうなこと、知らないでも讀んで行くうちには自然と會得しさうなこと、又は字引を引きさへすれば容易に分る筈のことなどは、そのまゝにしてあるところもある。

一、たとへば、本文の中にはしば〳〵古い詩の文句だの和歌の文句だのゝ一節を引用したり、又はさう云ふ故人の作に基づいて和歌を詠んだり、洒落を云つたりしてゐるところがある。それらは、そのもとの詩や和歌を知らないでも、「何か典據があるんだな」と思ひ及びさへすれば、大體何を云

はうとしてゐるのか察しがつく筈のことだけれども、でも知つてゐれば一層理解を助けもし、感興を補ふことにもなるので、ごく簡單に出典を擧げ、長い詩などはその前後の數節を、和歌はその一首の全體を記すことにした。但し、和歌の場合に原典が明かでないものは、〔花鳥餘情所引〕〔河海抄所引〕といふ風に、それを引用してゐる注釋書の名を擧げた。

一、此の物語の中で、一番讀者が混雜を起し易く、從つて、一番說明を要するものは、登場人物の呼び方であると思ふ。現代人が考へると不思議なことなのであるが、此の大長篇の中に出て來る多くの人物のうちで、本當の名前が分つてゐるものは極めて少い。主人公である源氏の君にしてからが、源姓であることは分つてゐるが、源の何と云ふ人であつたか、その正しい名は何處にも擧げてない。「光君（ひかるきみ）」と云ふのは、時の人が渾名（あだな）をつけてさう呼んだと云ふだけなので、もとより本名ではないのであるが、その渾名すら、此の人を呼ぶのに用ひられてゐる場合は殆どない。宇治十帖の主人公の「薫君（かをるきみ）」なども同樣である。男子が既にさうであるから、女子は尙更で、「紫の上」とか「空蟬」とか「夕顏」とか云ふ名は、恐らく物語の世界での渾名でさへもなく、作者が便宜上さう呼んでゐるに過ぎないやうに察せられる。渾名でも假の名でも、兎に角名前らしいものがあるのはよいが、大部分の人物にはさう云ふものすらも與へられてゐない。では如何にして人と人とを區別するかと云ふのに、男の場合には「左大臣（ひだりのおほとど）」とか「中將の君」とか云ふ風に官名を以て呼び、女の場合には

「何處そこのおん方」と云ふ風に、その人の住んでゐる御殿、場所、方角等を上に被せて呼ぶことが多い。しかし此の物語のやうに數十年に亙る出來事を取り扱つた小說の中で、さういつ迄も一人の人物が同一の官職を占めてゐたり、同一の場所に住んでゐたりする筈はないので、自然此の呼び方は甚だ紛らはしいことになる。たとへば、「頭中將」「尙侍の君」などゝ云ふ名で呼ばれてゐる人はその時々に依つて違つて來る譯で、源氏の君なども、最初のうちは「中將の君」であるが、追ひ〳〵「大將の君」になり、「大臣」になると云ふ工合である。その上女房にも「中將の君」や「少將の君」などゝ呼ばれるのがあり、又「右近」だの「侍從の君」だのと云ふ同名異人が、同じ場面へ出て來たりする。そこで、古來の源氏の注釋家達が、「柏木」とか「夕霧」とか「眞木柱」とか「玉鬘」とか云ふやうに、篇中の重要人物にそれ〴〵ゆかりのある帖の名を附けて呼んでゐるのは、此の混雜を防ぐためであつて、原作者の知つたことではないのであるが、私も頭注にはそれらの昔からの云ひ方を蹈襲して、紛らはしい人物を指示することにした。但し、人の名をそれと露骨に指さないで、間接な方法で云ひ現はすことは、今もわれ〳〵の一部に殘つてゐる奧床しい習慣の一つであるから、本文は何處迄も原作の云ひ方に從つてゐる。

一、一度頭注を施した事項でも、讀者の便宜を慮つてところ〴〵に說明を繰り返してある。

一、和歌は、散文に譯しては講義に墮してしまふし、さうかと云つて、現代風の和歌に直すことは、

私の技倆では覺束ないし、又專門家を煩はしてさう云ふ試みをしたとしても、恐らくは此の物語の世界の空氣とは調和しないものになるであらうから、原作のまゝを載せることにした。それで、その和歌の解釋を頭注として書き入れてあるが、私は讀者が、往々にして相當の長さになるであらうその注を讀むために、そこで一々停滯しないことを望む。此の物語の中の和歌は、それが插入してある前後の文章とのつながりが非常に微妙に出來てゐるので、そのつゞき工合の面白さを味はふことが、和歌の內容を理解するのと同等に大切なのであつて、此の譯文では原文のやうには行つてゐないとしても、なるべくそこでつかへないですら〳〵と讀みつゞけて貰ひたいのである。讀者はくれぐれも、これらの和歌の價値の一半がその調子にあることを念頭に置き、時として意味が分らないことがあつても、調子の美しさが感じられさへすれば、その場は一往それでよいとして、先へ進んで貰ひたい。しかし一卷を讀み終つた後に、頭注の解釋を參照して、もう一度そこのところを讀み返して下さるならば、更に一層感興が湧いて來るでもあらう。

一　普通、現代小說の登場人物の年齡は、何歲と云ふことがはつきり斷つてなくても、讀めば大凡そ想像がつく。此の物語の場合でも、原作者と同時代の人が讀んだ頃には、さうであつたらうと思ふが、今と昔とでは「幼年」や「老年」の言葉の內容が大變違ふので、現代小說のやうなつもりで見當をつけると、考へ違ひをすることが多い。此の原作者は、主人公の年齡を每年書き留めてゐる譯

ではないが、五十餘歳で死ぬ迄の生涯を述べる間には、今年何歳になつたと云ふことを記してゐる箇所もあるので、これに基づいて計算して行くと、何の卷の頃にはほゞ何歳であつたと云ふことが分る。又主人公と深い關係のあつた婦人たちの年齢なども、大概分るやうになつてゐるのであるが、こゝでは、せめて主人公の年齢だけを、あまりうるさくない程度に、ところ〴〵書き入れて、讀者の注意を促すやうにした。

# 新譯源氏物語卷一目次

潤一郎新譯源氏物語の普及版について……一
總目錄……三
例言……九
桐壺……一
帚木……三三
空蟬……八五
夕顏……一〇一
若紫……一五三



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c